

安倍能成

「い」ろ「ろ」を読みて

「こゝろ」を讀みて

「思想」の漱石記念号には何やら書かねばならぬ義務の如きものを感じていた。しかし漱石先生の作品に親まな
いことはずいぶん久しく、急に書こうと思うと何を書く
べきかに惑わざるを得ない。そこで私の好きな作品の一
つの「こゝろ」を久しぶりで読んで、その感想を中心に
何か書いてみることにした。これは作品の研究でもまた
批評でもない。ただこの作を通じて得た先生への感想に

すぎない。

元来私は先生のファンではなかった。詳しくいえば先生の作品の愛読から出発して先生に接近したものではなかった。先生が「ホトトギス」に「吾輩は猫である」を發表された時にも、当時「ホトトギス」の読者でなかった私が、それを読んだのはずっと後のことである。その上当時先生の初期の作を読んで面白いと思ひ、かつその文章と着想とに感心はしても、それは私をして先生の門に赴かしめるほどのものではなかった。私の志が創作になかったということもあるけれども、先生の作は当時の

私を引きつける力において例えば藤村の作に及ばなかった。「東京朝日」に出た「虞美人草」や「坑夫」などにも、毎日毎日を楽しみにして愛読するほどの牽引力を感じずるまでにはならなかった。私はすでに郷里で小学生だった時分に、中学校のえらい先生としての風貌を仰ぎ、高等学校で一学期の間先生から英語を教わったけれども、もし先生が下掛宝生流の謡を高浜虚子氏の薦によって私たちと一緒に稽古されることがなかったら、私はあるいは先生のお宅に伺うことはなかったかもしれない。あつたとしてもそれはだいたい遅れたのではないかと思う。先

生と親しく接触するようになって、私を引きつけたものは先生の作品よりもむしろ先生の人間であつた。この傾向はあるいは独り私ばかりのことではなく、先生の門に集まるほどの者皆にとって、そうであつたかも知らないが、それにしても私には先生の作品を中心にして、また作品を通じて先生と交渉するといふことが、彼らの多くのごとくにはなかつたのである。「虞美人草」や「坑夫」に次いで朝日新聞に出た「三四郎」も、私にはほとんどはつきりした強い印象を残していない。残っている印象、たとえば広田先生の「偉大なる暗闇」だとか、広田先生

「哲学の烟を吹いた」とかいう一節は、私にはむしろ態わざとらしい人工的ないやみをさえ残したくらいである。もつとも今になってこの作品を読んでみたら、はたしてどういう感じがするかは分らないが、私が先生の作品に際立って興味を覚えて来たのは「それから」をもって最初とする。その理由はそれが若かった私の最も興味を持った恋愛問題を正面的に取扱った、恐らく先生の最初の作品だということにもあるけれども、私の記憶にして誤なくば、先生のその後の作品に一貫する自然の真実と人為の虚偽との矛盾相剋というテーマは、すでにこの作品に

おいても鮮かに取扱われていたと信ずる。「それから」の次に出た「門」は、過去に恋愛の苦しい歴史を抱いて相倚あいよれる寂しい静かな夫婦の生活を描いたものだったと記憶するが、その当時先生が「虞美人草」の技巧を嫌がられて、「門」の作風を愛しておられたことは、先生の口ぶりからも窺うことができた。「門」の中に現われたつつましい、ひそやかな、正直な、静かな、明るくはないが澄んだ人間や生活、こうした人間や生活の醸成する空気は、「こゝろ」においても受け継がれるとともにいっそう洗練されて来ているように思う。

今手許に全集も揃っていず年表もないので、確かなことをいい難いが、「門」の後に明治四十三年八月の先生の修善寺の大患があり、生死の間をくぐって後、先生は静かに「思い出す事など」を書き、再び新聞小説として「彼岸過迄」については私はほとんど記憶を持っていない。ただそれが個々の短編を重ねて一長編を構成するようにならうに仕組む一つの企てであったことを知るのみで、新聞ではなんだか煩わしいような気がしてついつづけて読まず、その中の「須永の話」を鈴木三重吉君が十銭の小本にして出した時に、はじめて纏めて読んで面白いとは思

つたが、その内容はほとんどぜんぜん忘れて了^{しま}つた。明治四十三年の大患は先生の生活にとつては、心身ともに一つの転機を与えたものであるゆえに、その後の初めての小説であるこの「彼岸過迄」も、その意味でまた問題を提供するかと思うけれど、今いったわけで私には何一つ考に上ることがない。数ある先生の小説の中で私にとつて興味の多いのは、その後に出た「行人」「こゝろ」「道草」および最後の未完成の作品「明暗」である。その中「道草」は先生の作品中に稀な自叙伝的小説として私に興味が多かったが、「明暗」は先生の「則天去私」

の標語を芸術的に試みた作品だと称せられるにかかわらず、単行本になった当座の私には、どうも深くすつとはいりこんで来ないような処があつた。けれどもこれらの印象は皆十年乃至二十年以前の読後感であつて、先生の作品に接しないこともずいぶん久しいものである。私は久しぶりに先生のこれらの作品を読み直してみたいという欲求を強く感ずる。ことに小宮の「漱石襟記」そうせきざつぎ中の「明暗の構成」を読んだ時には、明暗を再読してみたいという要求を強く感じた。さらに先生の大患以後の作品を通覧して、その間に共通なテーマとそれの発展とを考察す

ることは、意味ある仕事だと考えた。しかし私には今そういうことをするだけの余裕がない。そこでわずかに「こゝろ」一編を取り来って、勝手気儘な感想を述べることにした次第である。

二

「こゝろ」は大正三年中ごろ（四月二十日―八月十一日発表）の作である。先生は大正五年に五十歳で亡くなられたから、それはちょうど四十八歳の作である。「道草」

は四十九歳、「明暗」は五十歳、そうして「こゝろ」に先だつ「行人」は四十七歳から四十八歳にかけての作である。

「こゝろ」が新聞に発表になるわずか六日前の四月十四日の先生の寺田寅彦宛の手紙に、……

「……近ごろは人を尋ねず、あまり人も好まず、なんだかつまらなさうに暮しをり候。小説も書かねばならぬ羽目に臨みながら、日一日となまけいまだに着手つかまつらず候。これも神経衰弱の結果かも知れず、厄介に候……」

とある。晩年になつてからおそらく先生は踴躍ゆうやく的な気持で新聞小説に取りかかれたことはあるまい——その中「明暗」はいくらか例外とすべきものかしのれない——が、また創作にとりかかる前の気の重さ、おつくうさは、むしろ作家の常とすべきものであろうけれども、この作を作る時の先生の心境が孤独な主人公を描くにふさわしい孤独なものであつたことは、この手紙の中の短い文句からも十分に想像せられる。先生は遡りて大正元年十二月四日「行人」の発表二日前の津田青楓宛の手紙にも、

「……芸術家が孤独に安んぜられるほどの度胸があつ

たら定めて愉快だろうと思います。あなたはそう思いませんか。私の小説を読んで下さるのは難有い、どうか愛想を尽かさずに読んで下さい。私は孤独に安んじたい。しかし一人でも味方のあるほうがまだ愉快です、人間がまだそれほど純乎たる芸術家気質になれないからでしよう。……」

とあり、同日松根東洋城宛の手紙にも、

「……近ごろ小説を人に読んでもらふ勇氣失せ候へども、それでも読んでもらひたき心も有之候。今度のも願くは御読被下度候。……」

とある。これは作者として孤独に安住せんとしてしかも人に求める心を棄て難き心境であるが、「行人」の主人公なる兄の一郎の心境は、この心持をいつそう切実に先鋭にそうして焦躁的にしたものである。こういう重苦しい心持で、こういう重苦しい題材を取扱おうとした作者の、作にかかる前の進まぬものうい気持は、大患以後ことに穴の開いた作者の健康ということをも併せ考えるならば、まことに当然のことである。

三

しかしこういう心持で取りかかった作品も、中途からは油が乗って来て、作者の最初の意図よりもはるかに長くなるのはいつものことであつた。現にこの「こゝろ」にしても初めは短編をいくつも書くつもりだつたのが、作者自身予期しない意外の長編になつた（大正三年七月二十二日山本松之助宛書簡参照）。先生は「彼岸過迄」の予告に、

「かねてから自分は個々の短編を重ねた末にその個々

の短編が相合して一長編を構成するように仕組んだら、新聞小説として存外面白くは読まれはしないだろうかという意見を持していた。が、ついそれを試みる機会もなくて今日まで過ぎたのであるから、もし自分の手際が許すなら、この「彼岸過迄」をかねての思わくどおりに作り上げたいと考えている。けれども小説は建築家の図面と違って、いくら下手でも活動と発展を含まないわけには行かないので、たとい自分が作るとはいいいながら、自分の計画どおりに進行しかねる場合がよく起って来るのは、普通の実世界において吾々

の企てが意外の障害を受けて予期のごとくに纏まらな
いのと一般である。したがってこれはずっと書き進ん
で見ないとちよつと分らないまったく未来に属する問
題かも知れない」

といっておられる。この文章によって靦い得られること
の一つは、先生は新聞社に対して面白い小説を書く義務
を感じておられたことである。大学の先生としてよき講
義を作るために神経衰弱になるほどの勉強をされた先生
が、新聞社の社員として、ことに小説を書く以外に自由
を与え、病後の身体に対して、自分の書く小説に考慮を

払われたのは当然である。そうして事実において先生の小説は白鳥や藤村の小説に比べて、日々を面白く読ませる小説でもあった。当時この事をもって先生を新聞小説家となし、さらに通俗作家と呼ぶところの岩野泡鳴の如きものもあった。なるほど日々の読物として面白くなくて、全体としてこれを通読する時には感銘の深いような性質の小説もあるし、それは小説として尊重に価するものである。しかし全体として面白いまたは優れた作品が、部分として日々の読物として面白くない作品でなければならぬという理屈はどこにも存在しない、むしろ反対に

全体としての面白さまたは優秀の、部分部分にも現われかつ生きておるほうが、より自然であるといつてよかるう。この点から考えて先生の小説が新聞小説として優れていたことは、必ずしも先生の作品の価値を貶する理由にはならない。先生は持前の義理固さから、単なる小説としてに止まらず新聞小説としての立場をも考えられた上に、またそういう技巧をもこなし得る人であった。先生は例えば「草枕」などにおいて示されたように、小説家として類たぐい稀な文章家であつたばかりでなく、小説全体の結構、人物や舞台の出入や配置、事件の抑揚や頓挫、

進行や停滞その他の技術においても、活発に頭を働かせ得る技巧家であつた。その上に芸術家としての幻想の豊富はよく人間と自然と物象とを具体的にかつ多彩的に紙上に現出し、その都会的なウイットとインテレクチュアルなユーモアとは読者の興味を促進し、その明晰な心理的解剖は読者をして自分の心持を説明され得た快感を催さしめる、等の条件が加わつて、先生の小説を面白い新聞小説としても成功させたのだと信ずる。しかし先生が新聞小説という条件を考慮されるために、芸術品としての小説がいくぶんでも害されはしなかつたか、もしくは

先生がそれを考慮に入れられなかったならば、先生の小説がいつそう醇化されはしなかつたか、こういうことは問題になり得ることであり、私もいくらかその点が気にならないこともない、けれどもそういう議論は実際の作品において具体的に論じなければ意味をなさぬことであり、私には今それをなし得るだけの鮮明な印象を先生の全作品について残していないことを告白しなければならぬ。

けれどもここに明白に言い切れることは、先生の小説が新聞小説として成功し得た重なる原因が、先生の小説が

低ていかい徊派、余裕派と呼ばれ、人生の一大事を忘れて閑葛藤に没頭するもののごとくいわれたにかかわらず、非常に戯曲的要素に富んでいた点にあることである。先生は一生遂に戯曲を書かないで逝かれたけれども、先生の小説は脚色者にその人を得れば、ほとんど皆立派に戯曲となり得るものばかりだといっても過言でない。現に先生の小説中最も動きの少いこの「こゝろ」にしてもが、その中の「先生の遺書」の筋書を用いて、恐らく容易に一つの戯曲を作り得るであろう。

四

今一つ先生の小説について考えられることは、前にもちよつと触れた先生の小説が取りかかりがおつくうでも、いつも中途に油が乗って来て予期よりも長くなることである。そうしてその一つの適例がやはりこの「ころ」であることも、前述のごとくである。

先生は優れた頭脳と教養との持主であり、作品の思案布置について頭を働かせることは、外の作家よりまさっていた。その上に先生の小説が、ほとんど唯一の例を外

にしては、事実そのままの描写でなく、事実を材料として、それから示唆を受けているにしても、それが新たに創作的な組合せを受けた点において、自然主義もしくは写実主義の作家と性質を異にすることは、いつそう多くその作品のために作者の頭脳と構想力とを要求せしめたといつてよかろう。先生作品が特に当時自然主義的作品の中にあつて、頭で作つた、人生の眞実に遠いものであり、我々を考えさせないで我々を不眞面目に遊ばせるものだ、との批難を受けたのも、一つにはそこに関係するであろう。けれども他方に前掲の「彼岸過迄」の序文

でもすでに、小説が建築家の図面と違ってそれ自身の活動と発展とを含み、自分が作るとはいいながら自分の計画どおりには進行しかねることを語り、しかもそれを「普通の実世間において吾々の企てが意外の障害を受けて予期のごとくに纏まらないの」と軽くあしらっておられる。これは小説自身の活動と発展とが頭脳の作り上げた構図を妨げたり破壊したりして、その為に作品としての完成が傷けられる意味にも取られるが、その必しもしからざることは、多言を要しない。小説自身の発展と活動とが頭で作った構図を裏づけ命づけるのでな

ければ、作品が成立し得ないことは勿論であるが、それが単に構図の埒内に流れるに止まらず、それから溢れ出で、ある場合にはこの構図を画餅のごとく蔑視して、それ自身の生命によるおのずからなる道を随時に関きつつ流れるということはおそらく傑れた作品において常にあり得ることであろう。しからば小説自身の活動と発展とは何かといえ、それは実に創作の中に吸収され、創作とともに流れる作者の生命である。それは作家化された創作であるとともに創作家された作家である。作家は創作を生むとともに創作にとっつかれる、それはあたか

も子を生まんとする妊婦の苦みに似たものである。生まれる子が妊婦のものでありながら最も多く妊婦の自由にならず、却て妊婦を支配しかつ苦めるものであるのと同じことが、創作と作家とについてもいわれるのではないか。多くの作家という作家は程度こそ異なれこの苦みを経験しない者はないであろうが、漱石先生においてはことにこれが甚しかったように思われる。先生の精神病的傾向が遺伝的素質によるのかどうかは詳かにしないが、しかし多くの場合においてそれは創作という子を腹に持てる妊婦の激しい易感性となって現われたように思われ

る。

しかし先生は一方創作にとっつかれる程度が烈しいとともに、他方にそれに堪え得るエネルギーもまたずいぶん強かった。かくて先生は先生のいわゆる小説「活動と発展」とに乗って、初めは短編の積りのが長編になったり、百回で済む積りが百二十回にも三十回にもなるというような経過を繰返された。ここに明かに先生の長編作家たる素質が現われていると思う。先生は傑出した短編作家であつたけれども、その短編もいずれかといえれば作者の創作的活動の流れを制し切れずして長くなるという

傾向があつた。そういう点で先生は都会人的に痩せた作家でなくて、むしろ原始的にスタウトな作家であつた。この事を思う時に、先生の胃弱に悩まされた肉体が剣客のような恰好を有し、先生の謡をうたう声の量が、少し鼻にかかりながら実に大きかつたことを連想せざるを得ない。先生の作品が拵物こしらえものだという批難を受けた一つの理由が、先生の創作における頭脳の参加の多量ということとともに、先生の小説自身の発展と活動との線が太く強く、ここに作られた第二の自然が第一の自然にかまわないような感じを読者に与えたのにある、ということとは

いえないであろうか。私の記憶によると「明暗」のごときはたしかにこういう感じを与える。しかもこの作品自身は作者の中にみいつて、辰野隆君の指摘したように何となく一種の鬼気をさえ感ぜしめるような所があるのである。

五

先生は「こゝろ」を出し始めて四五日目の四月二十四日に、兵庫県の一少年松尾寛一に与えて、

「あの『心』という小説のなかにある先生という人はもう死んでしまいました。名前はありますが、あなたが覚えても役に立たない人です、あなたは小学の六年でよくあんなものをよみますね。あれは小供がよんでためになるものじゃありませんからおよしなさい。

……」

と書いておられる。この手紙に示されておることは私が今初めて気づいたことであるが、「坊っちゃん」の中にある「赤シャツ」だとか「山嵐」だとか「坊っちゃん」自身だとかを、しいて実在の一つの人物にして了解ねば

承知しないような読者は、この手紙を見て「こゝろ」の中
中の「先生」を一つのモデルに帰してしまいたがること
であろう。この手紙によれば「こゝろ」の中の「先生」
に似た経歴を持った人が先生の知人の中にかつて生きて
いたということは、まず確かだと想像してよかろう。し
かしそれはこの小説に出て来たことが皆事実であること
を必要としないし、況^{いわ}んや「先生」なる主人公の考え方
や感じ方や人生観が、そのある実在の人物の考え方や感
じ方や人生観であるのを必要としないこと勿論である。
創作はたといかなる実在の人間をモデルにしても、結

局は作家自身の表現であるが、「こゝろ」こそはその意味において、またはそれ以上の意味において、最も多く作家自身の出ておる小説である。いったい先生は事件や人物の性格やを芸術的に把握する力が非常に優れておられる。これは例えば「坊っちゃん」の中の自分の知っておる光景や、自分の知っておる人物の特徴の描写などからも、具体的に証拠を提供することができる。しかしこうした事件や人物から示唆を受けたり、それを材料に使っても、それも全体的にそのまま描写し、そういうモデルや事件に引きずられたような作品は、先生の作品

の中には見る事ができない——自叙伝的な「道草」だけは別に考えねばならぬが——。こういう作風が、現実の描写をモットーとした自然主義的作品の時代に、真実に遠いものと見られたことは、前にも述べたとおりである。けっきょく先生の志すところは事件や人物を外から全面的に描写しようとするのではなくて、こういうものから示唆を受け、それを使って、内からそれを組織し命づけて行こうとするのでなくて、こういうものから示唆を受け、それを使って、内からそれを組織し命づけて行こうとするのである。先生自身の把^{つか}み得たる内的生命を以て

それらを有機化しようとするにある。作品の中心生命をなすものが、作者自身だということが、技術の上ばかりでなく内容からも最も多くいい得られるのは、実に先生の商品である。先生はいわゆるモデルを描写するのではなくて、先生自身を内から外へ押し出した。しかもそれは芸術的手段によってであるからして、そこに様々の人物や事件が用いられることはいうまでもない。先生の小説は初からこの傾向をたぶんに有していたが、大患以後、ことに「行人」と「こゝろ」とにおいてそれが最も著しい。小宮が「漱石襟記」中で、「比喩的に物言う事が許

されるならば、『行人』を書いて先生は一度狂気になり、『こゝろ』を書いて先生は一度死んだのであった」といったのは確かに中^{あた}っている、動^やもすれば拵物といわれるにかかわらず、先生の作のごとく作家自身の体験を豊富に濃厚に盛った作品が人生と人心とを教えることの多い理由、また先生の作品が長く読者の心を引きつける理由を主としてここに見出したい。

六

以下「こゝろ」に対する私の覚書のようなものを書き並べて見る。

一、この小説は全体に亘って、「先生」という主人公に対する純真な一青年の側から見た観察と、「先生」のその青年に対する告白とからできている。自己を否定する心持から世間との交渉を断ち、世間的活動に堪え得ず、世間に向って自分を閉じ、孤独を守っている「先生」が、青年の求めるところのない、ただ真実を知ろうとして無

技巧に肉薄して来る純真に対する尊敬と好意とによつて、その固い心を打開き、その誰にも語らなかつた過去の秘密を語るに至る美しい内的経過は、すこぶる鮮かにまたしみじみと語られている。

その「先生」が叔父に対する道德的信頼を失つた後、偶然後に恋人となる娘母の所に下宿する。初はこの母子をも信じ切れずして、色々な功利的目的の存在を疑つた。「先生」の神経が、「相手から照り返して来る反射のないためにだんく／＼静まった」とともに、孤独に堪え得ぬ、人間から暖みを求めて止まぬ心は、やがてその娘に対す

る恋となつて来る道行の中に、「先生」の「精神的に癩性」でありながら、否、あるがゆえに、相手の求めるところのない、素直な誠実に感じ易い敏感が示されている。

私は「先生」の中に表現されたこういう心境を思う時、漱石先生自身の裏に動いていた心境をも思わざるを得ない、すなわち私は、その当時に対してかつて没批評的な傾倒をもつて近づいて来た青年が、年ようやく長じて生意気に批評的になり、動やもすれば先生の細かな神経を刺激して、ある場合には、先生の孤独感を刺激する一方に、その後につづくヤンガー・ゼネレーションの青年らしい

傾倒が、また先生の心の固まりを和げ、塞がりを開く
うとしたという先生の経験を、その背後に想像するので
ある。

二、「先生」の徹頭徹尾道徳的な性格は、また先生の
そういう性格を語るものである。「先生」は知っている。

「私の暗いというのはもとより倫理的に暗いのです、私
は倫理的に生れた男です。また倫理的に育てられた男で
す。その倫理上の考に今の若い人とだいぶ違ったところ
があるかもしれません。しかしどう間違っても、私自身
のものです。間に合せて借りた損料着ではありません」

また「先生」は自分が義務に冷淡だから世間的交渉をしないのでない。「むしろ鋭敏すぎて刺激に堪えるだけの精力がないから」消極的な月日を送るのだというている。そういう「先生」が自分の道徳的信頼を破った叔父に対し執拗な復讐心を抱き、その復讐心が転じて人間を信じてやらないという心持になり、しかも人間の虚偽に敏感であるとともに、人間の誠実を無視し得ない。よき意味で「お人好し」の「先生」が、人から離れようとする心と人と和ごうとする心との矛盾に苦んでいる時、その矛盾を無造作に青年時代の恋愛の情熱に溶かされ、し

かもその燃える恋愛の欲求のために、いつの間にかその競争者を待ち伏せて陥れる猾策を犯し、その競争者の人格の善良に敬意を払わずして、それにつけこむという卑劣を敢てし、「策略として勝っても人間として負けた」という痛ましい自覚の烙印を、一生その額に印せざるを得ざる運命を負い、人間が性来悪いというよりも、「いざ」という間際に皆悪人に変るんだ」という恐ろしい事実を、仇敵視した叔父と自分との間に共通に、否、人間のすべてに見、しかも自分を罪人だと断ずる心持は、その懺悔の心持を積極的な人間愛に持って行くところの、一

面には強さ、他面には鈍感を持ち得ず、不測な悲劇的運命の下に、この運命を明かに知ることもなく、しかもその暗さを感じずにはいられないところの一生の伴侶たる妻に、つつましい、寂しい、人間の罪を背景に持った愛を贈る「先生」の生涯は、実際宗教の敷居にほとんど接触せんとする道徳的生涯であった。

「先生」は頭を働かせて判断する癖を持つとともに、それをハートに持って行かねば承知ができなかった。「冷かな頭で新しい事を口にするよりも熱した舌で平凡な説を述べるほうが生きていると信」ずる人である。そこに

やはり「先生」を通じての先生を見ることができ。要するに「こゝろ」はわが国の小説にほとんど多くを見ない道徳的な小説である。否これくらい純粹に道徳的なセンチメントを取扱ったものは、西洋の小説にもおそらくはたくさんあるまい。しかもそれは断じて抽象的な道徳的説教ではない。人生の道徳的眞実の描写であり、表現である。

なおつけ加えていいことは、先生の小説に現われた「道徳」は、人間の純眞なる心とその心から発した行為とである。それは人為的な世間的な方便的な約束、す

なわち人為に対して、よく自然という詞でいい現わさ
れている。こういう考え方は「それから」にも出てい
るし、「行人」にも著しく現われている。

今一ついいたいのは、先生の小説の中には、こ
ういう道徳的癩性者に対して、人生の一大事なる道
徳的誠実をあまり気にせず、しかもその人間は好
人物で快活でよく世間と睽離けいりしないよ
うな人間が描かれていることである。それはたと
えばこの作では青年の父である。「行人」では
一郎の弟二郎である。そうして先生には天真を傷
けぬ、こうした暢気な、いわばおっちよこちよ
いな一面も

たしかにあつた。そういう意味で一郎と二郎とは先生の分身であつた。先生を一郎のごとく狂せしめず、「先生」のごとく自殺せしめなかつたのは、おそらく先生の有するこの楽天的一面の力であつたであらう。

三、私は「先生」の恋のライバルのKが非常によく書けていると思う。一面には周囲に鈍感であつて、強い意志で自分の志すところに精進する道徳的エゴイズム、しかもそのエゴイズムの作為なく虚偽なき純真、同時に一切の責を自分に負つて人を累わさない孤獨的な強さ、それも努めてやったのでない自然的な強さは「先生」の遺

書の中に実に簡勁に、具体的に描出されている。たとえば「先生」から恋愛のことを問い詰められて、「覚悟、——覚悟ならないこともない」と、独言のようにまた夢の中の言葉のようにいったという一節、自殺した時の遺書の中に多くをいわず、「もっと早く死ぬべきであった」と洩らした詞のごとき、実にリアルに読者に迫るものがある。それと私の好むのは、「先生」の奥さんに現われた女性である。理解を持ちながら、それを頭に持って来ること欲せず、心臓の世界につつましく止めているような、静かな、暖かな、寡欲な女性である。

四、「先生の遺書」の中でなお問題にしようとするれば、「Kが何故に自殺したか」「先生は何故にKの自殺について、妻の前に自己を告白しなかったか」「先生は何故にその愛する寂しい妻を残して自殺していったか」等があるであろう。私は今小説の描写をするより以外に、これらのことを説明する興味を多く持たない。これらが読者としての私には不自然なく肯定されることをいうに止めておく。

また「先生」はその遺書の中に、明治天皇の崩御に説き及ぼし、「私は明治の精神が天皇に始まって天皇に終

ったような気がしました。最も強く明治の影響を受けた私共が、その後生き残っているのは必竟時勢遅れだという感じが胸を打ちました」といい、「自分が殉死するならば明治の精神に殉死するつもりだ」といい、同時に乃木大将の明治十年の西南役以来死のうと思いつつ、生きながらえた三十五年の苦衷に深い同情を払っている。これについても今論議する余裕を欠くが、ただこの「先生」の告白がまた先生の胸臆の一隅にあつた実感であつたらうことは、想像するに難くないことを一言するに止めよう。

(昭和一〇・一一「思想」漱石記念号)

日本文学電子図書館

「こゝろ」を読みて

著 者 安倍能成

制作者 宮澤一郎

底 本 「漱石全集 第11巻」角川書店
昭和42年7月30日 7版発行

日本文学電子図書館